杉田すゞについて

ー生立ち・英学への志向・幼稚園教育との関わりでー

柳沢　芙美子*

はじめに
１．出生から東京女子師範学校へ
２．結婚、福井から京都へ－英学への志向－
３．京都府尋常師範学校での幼稚園教育との関わり
まとめにかえて

はじめに

杉田定一（1851－1929）は、地租軽減と国会開設を求めた自由民権運動の指導者として知られる福井県出身の政治家[1]である。定一の妻[2]となった杉田すゞ（1865－1916）は、鳥羽藩士の娘として生まれ開校間もない東京女子師範学校を卒業していた。

写真１　杉田すゞ
『杉田鶉山翁』1928年

すゞの事績や人物像については、これまでほとんど取りあげられたことはなく、わずかに立項されている『日本女性人名辞典』においても「貴族院議員藤田四郎の妹。鳥羽藩士藤田竜蔵の二女。明治一五年（一八八二）東京女子高等師範学校卒業。のちに杉田定一の妻となり二男一女を生む」[3]と記述されるのみであった。

しかし近年、家近良樹氏がほとんど論じられなかった定一の父杉田仙十郎の幕末維新期の思想形成を取りあげ、くわえて、すゞの書簡や定一との関係を論じ、初めてすゞの人物像に着目する論考を複数明らかにした[4]。また池内啓氏も、仙十郎・すゞと定一の間で交わされた書簡を詳細に紹介している[5]。

こうしたなかで当館では、平成24年度福井県文書館企画展示「杉田仙十郎・定一・鈴おやこ展－自由民権の土壌－」（2013年１月25日～４月14日）で杉田定一を支えたふたりの人物、仙十郎とすゞに注目し、大阪経済大学・同志社大学からの借用資料[6]とともに、県内豪農層の資料[7]を紹介した。

ここでは、この企画展に関連した調査で明らかになった杉田すゞの生立ち、初期の東京女子師範学校卒業者として小学校・幼稚園教育に先駆的に関わった側面に注目してその事績をたどってみたい。

＊福井県文書館主任

表１　杉田すゞ 略年譜

西暦年（和暦）		年齢	事　　項
1865年（慶応 1）	5月	1	15日、三重県士族藤田龍蔵次女として志摩国答志郡鳥羽城下藤之郷町奥谷に生まれる
79年（明治12）	2月	15	東京女子師範学校小学師範科へ入学
82年（明治15）	7月	18	同校同科を卒業
	8月		同校附属女児小学校に教員として勤務
84年（明治17）	2月	20	同校附属女児小学校訓導
	8月		杉田定一と結婚
85年（明治18）	9月	21	組織改編により、東京師範学校附属小学校訓導
	12月		長女、和（かず）が生まれる
86年（明治19）	2月	22	同校辞職、坂井郡波寄村に移る
	6月		（定一、欧米遊学のため福井を出発）
87年（明治20）	2月	23	長男、遠（とおし）が生まれる
	7月		和病死
	10月		遠とともに京都へ転居し、英学を学ぼうとする
	12月		下京区高等小学校訓導 *
88年（明治21）	3月	24	京都府尋常師範学校訓導 *
	6月		（定一、欧米遊学から横浜へ帰国）
89年（明治22）	9月	25	京都市保育会発会式で講話 **
			同校辞職 ***
90年（明治23）	7月		（定一、第１回衆議院議員選挙に当選）
91年（明治24）	2月	27	次男、陶二が生まれる
96年（明治29）	4月	32	次女、八重が生まれる ****
1916年（大正 5）	6月	52	26日、死去

注１）年齢は数え。
注２）* は、「教員進退録」（明20－35・明21－34、京都府庁文書、京都府総合資料館蔵）、** は、『京阪神保育会雑誌』第１号、*** は、「教員進退綴」（明22－31、京都府庁文書、京都府総合資料館蔵）、**** は、『八重子』（私家版、1931年、矢尾真雄家文書、福井県文書館蔵）による。

１．出生から東京女子師範学校へ

大阪経済大学杉田定一関係文書には、仙十郎が繰り返し書き記した多数の覚書[8]が残されており、そのなかの履歴書から、出生から定一と結婚するまでのすゞの略年譜を追うことができる（**表１**）。

すゞの父藤田龍蔵[9]は鳥羽藩稲垣家の下級士族で、1857年（安政４）では「御同心　新井弘人組」４石１人扶持[10]、64年（元治１）では「御組目付」５石２人扶持[11]、70年（明治３）では７石５斗（５石２人扶持）[12]がみえる。杉田定一の政友として活躍する栗原亮一（1855－1911）の父栗原勇蔵（亮休）も鳥羽藩士であり、64年「御料理人」６石２人扶持、69年「書記方」５石２人扶持と、藤田家と同様の下士層であった[13]。

また、すゞの兄藤田四郎（1861－1934）は、1885年（明治18）東京帝国大学法科大学を卒業し、外務省参事官、逓信相・農商務相の秘書官などをへて、98年農商務次官となった官僚であり、1901年から貴族院議員を務めた[14]。

三重県の鳥羽藤之郷町奥谷に生まれたすゞがどこで小学校教育を受けたかは明らかではないが、1879年（明治12）2月、15歳で東京女子師範学校小学師範科に入学、修業年限３年半をおえて82年７月に卒業した（入学者12名、卒業７名、**写真２**）。**表２**でみるように東京女子師範学校で初めて卒業

生を送りだしたのが79年２月のことでありすゞが卒業する前年までの卒業生数の累計はようやく100名を数えたところであった[15]。

卒業の翌月、８月23日付で附属の女児小学校に教員として勤務（月報12円）し、84年２月には同校の訓導となった（年俸180円）。84年の東京女子師範学校職員の構成は、校長兼教諭の那珂通世（東洋史）をはじめ、教諭６名、助教諭８名のもとに、すゞと佐方鎮子[16]の２名の訓導がおり、ほかに長期にわたって寄宿舎に関わった山川二葉[17]・安達安子、鳩山春子・後閑菊野ら文部省用掛14名を含む48名であった[18]。

この時期の東京女子師範学校卒業者のうち1892年（明治25）段階で教職に就いている者の割合をみると、明治10年代の卒業者では２割から６割と年によって大きく変動していた。すゞと同期の７名の状況をみてみると在職者は澤すて（千葉県北条高等小学校訓導）１名のみ[19]であった。すゞを含む４名は卒業後まもなく県師範女子部や小学校に就職したものの、結婚を機に数年で退職していた[20]。また当時は死亡する者も少なくはなく７名中２名が亡くなっている（全体では92年までに卒業者の８％が死亡）。

写真２　杉田すゞ 卒業写真　　お茶の水女子大学蔵

表２　初期の東京女子師範学校（小学師範科）卒業生

卒業年	小学師範学科		うち		計
	２月	７月	就職者	死亡	
1879年（明治12）	15	18	11	1	33
80年（　13）	19	15	9	7	34
81年（　14）	17	16	14	2	33
82年（　15）	11	7	5	2	18
83年（　16）	12	12	15	0	24
84年（　17）	14	13	13	3	27
85年（　18）	11	15	7	1	26
86年（　19）	16	10	16	3	26
87年（　20）	16		13	1	16
88年（　21）	11		7	0	11
89年（　22）	4		1	0	4
計			111	20	252

注）『女子高等師範学校一覧』（明治25－26年）による。

２．結婚、福井から京都へ－英学への志向－

すゞと定一は、1884年（明治17）７月13日に東京で挙式[21]、８月19日に入籍した[22]。仙十郎の書簡控から、この結婚にあたっては、すゞと同郷の鳥羽出身の栗原亮一の仲立ちがあったことが指摘されている[23]。

定一にとっては、松方デフレが進行するなかで1882年（明治15）末に創刊された『北陸自由新聞』が発行停止処分を受け４か月ほどで終刊、南越自由党もそれまで運動を支えていた豪農層を組織できずに83年なかばには休止し、翌84年10月の自由党解党によって自由民権運動はほぼ終息をむかえる時期にあった。

結婚直後の８月30日、定一は上海、北京等中国北部をまわる２か月の海外旅行に出発する。これは、この月上旬に上海に開校した、植木枝盛・中江兆民・杉田定一ら自由民権活動家が主導する語学学校東洋学館と、同月にはじまった清仏戦争下の中国の状況を視察するためであった[24]。

池内啓氏は、この清国視察を題材にした定一の漢詩集「遊清雑唫」[25] に収められた詩から定一のすゞへの思いを次のように紹介している。「寄内」（内に寄す）と題された詩[26] では「纔結金蘭忽遠征　ワヅカニ金蘭ヲ結ンデ忽チ遠征ス　夢魂夜夜至東京　夢魂ハ夜々東京ニ至リ（中略）君磨学術吾経歴　君ハ学術ヲ磨キ吾ガ経歴ト　倶博人間第一名　トモニ人間第一ノ名ヲヒロメン」[27] と離れていても互いに共有する志のもとにあることが詠われていた。

すゞは結婚後も教職を続け、1885年（明治18）９月には東京師範学校と合併したのちの附属小学校で訓導となった（年俸180円）。

この時期にすゞの記したものはほとんど確認できないが、ただ１点、1885年（明治18）と推定される５月27日付の定一あての書簡[28] が残されている。すでに家近氏が言及し、翻刻もされているので全文[29] はそちらを参照していただきたい。すゞは定一と離れて東京にあり、第１子を妊娠中であった。自身について木曽義仲や西郷隆盛の愛妾のごとくありたいと記し、読んだばかりのイタリア統一運動の英雄ガリバルディの伝記や、橋本左内の顕彰碑建設の動きを報じた新聞記事について感想を書き送っていた。

ジュゼッペ・ガリバルディ G.Garibaldi（1807－82）は、イタリアの遅れた統一（1861年）が明治維新とほぼ同時期に重なっていたことから、当時の日本でもよく知られた人物であった[30]。『杉田鶉山翁』でもガリバルディは定一の「最も愛する」[31] 人物としており、亡くなって間もないこの英雄について夫婦間で話題にする機会があったのだろう。すゞの書簡について、前述企画展パンフレットに掲載した現代語訳から、その書きぶりをみていただきたい。

> 孟子もいっているように戦国時代ならば、あるいは夫婦離散することもあるでしょう。でも、それさえ離散はよくないと思うのです。すなわち、夫が出陣すれば、わたしもまた扶助のために出陣したい。今はまして戦国ではないのです。乱国であっても、夫婦が相離散する時ではないでしょう。
>
> この頃都会にも地方にも学校ができています。そこで郷里に帰って勉励しようと思います。あなたがもし七月に出京しないならば、わたしは一人でも出立しようと思っています。
>
> 『詩経』では、自分が模範となって妻を従わせ、それを兄弟にまでおよぼし、それによって家と国を治めてゆくとされています。あなたはいつもいっていましたよね、木曽義仲の巴御前のように、西郷隆盛の愛妾のように、英雄豪傑の心を理解し、これを助ける心が今の世でも大切だと。まったくそのとおりです。わたしもこの頃とてもこのことに感じるところがありました。
>
> また近頃ガリバルジの伝記を読みました。天性寛宏正直の人であればこそ、自由の理を主唱し、最後にはみごとにその志を遂げることができたのだと。そうとはいえ、遠地に流されあるいは捕えられ、危難千歳のもとで志ある者がひどく苦しめられていますね。それでも、わたしは男子を産んだらガリバルジのような士気を養成したいと思っています[32]。

すゞは、定一の政治活動から夫婦が離散している状況を嘆くのみではなく、定一の帰京がさらに遅れるのであれば、自分は実家にもどり勉学・勉励を続けたいとする考えを伝えている。それとともに、困難だが「自由の理」を唱導し、その志を実現したガリバルディへの共感を、夫や生まれてくる子どもに重ねて表現している。家近氏は「結婚当初のすゞは定一を夫というよりは、むしろ同志とみていた」[33] としており、定一が清国の視察で詠んだ前述の漢詩「寄内」の一節「君磨学術吾経歴　倶博

人間第一名」とも呼応する姿勢といえるだろう。

1885年（明治18）12月長女和（かず）が誕生し、その後すゞは娘をつれ坂井郡波寄村（現福井市）に移り、しばらく定一とともに暮らした。正式な辞職は翌86年２月９日と確認できる[34]ので、おそらく２月以降に転居したものと推測される。そして、それもつかの間の６月、定一は視察と勉学のために約２年間の欧米遊学へ出発し、さらに翌87年７月には１歳半の娘を病気で亡くしてしまう。前後して生まれた長男遠（とおし）も病弱であったことから、10月、すゞは福井を離れ、息子をつれて医療環境が整った京都に転居した。このことについて、ロンドンにいた定一にあてた書簡で、仙十郎は「十月十六日、鈴・遠・守りつ以三人出立致シ、和ニ困ツタデ却テ西京ニハ大医有之、遠ノ養育方宜シカロウト存、思イ切」[35]ったと記している。

この頃杉田家の財政は、仙十郎の発病（83年１月）と定一の遊学によって、さらに窮乏を深めており、すゞは転居まもなく12月２日付で下京区高等小学校に訓導として務めた。

小学校職員御任用伺

任下京区高等小学校訓導　　杉田すゝ

但上級十等俸

右別紙申請取調候処、適任ト見認候間願出候通御任用相成度此段伺者也[36]

そしてこの京都転居には、家近氏が明らかにしたように同志社の創立者である新島襄夫妻の支援があった[37]。定一と新島との関わりは、これ以前の1883年（明治16）８月、新島が大学創立のために石川県大聖寺近辺から福井を訪れたことに始まる。新島はその際定一に「大学設立発起人トナリ該県下ニ於テ募集等ニ着手」[38]することを依頼していた。その旅行記「出遊記」[39]では、新島は８月23日夕刻、福井の岡部長宅（定一の先妻都賀の実家）で大阪から戻ってきた定一と面会し、夜９時過ぎまで「大学ノ必要ナルト耶蘇教ノ大切ナル事ヲ説キタリ、氏は大ニ賛成」、しかし家内に病人（都賀）がいることに気づきただちに辞去したとしている。この後定一が大学設立発起人となることはなかったが、定一と新島との関係は継続され、仙十郎もキリスト教に寛容で、新島に対して非常な敬愛を寄せていた[40]。

仙十郎の書簡[41]からは、すゞの京都転居に際しての新島周辺の具体的な動きがわかる。当初、「新島氏非常ニ鈴之儀ヲ御配慮被下候由、同志社江月給拾円、無月謝ニ而英学研究可致旨」という申入れが、府会議員の「大沢」という人物を通してあったとされる。ここで「英学」とは、単なる語学の修得のみにとどまらない英語圏の政治・文化・思想についての学問を指していた。また大沢とは新島から洗礼を受け、同志社女学校の経営を支援していた実業家大沢善助（1854－1934）であり、その後「大沢之夫婦ト藤田愛爾相談」[42]のうえ、世間的な信用をえるためにも当面は高等小学校に勤務することにしたとされる。

藤田愛爾は、1883年（明治16）６月から新島襄（校長）のもとで85年６月まで同志社女学校の教頭を務めた人物であった[43]。こうした事情から鈴からも仙十郎に対して「新島ノ夫婦誠ニ親切ナル事ニ付、宅ゟ礼状出シ呉トノ事」と頼んできていることも記されていた。

このようにすゞの京都転居は、病弱な長男にとってよりよい養育環境を求めただけではなく、すゞ自身が英学を学ぶという、もう一つの明確な目的をもつものであった。すゞはこのことを家近氏が指

摘するようにロンドンの定一にも伝えていたようで、仙十郎にあてた書簡で「此間鈴ヨリ来状有之、何ニカ英学勉強ノ為メ京都表へ罷越候趣、若ヒ者ハ皆々諸方へ離散、宅ニハ御老人ノミニ而誠ニ御気之毒ニ奉存候、併し今日ノ時勢兄弟姉妹妻子タル者互ヒニ相依頼セズ、各々其正当ノ目的ヲ立テ、人ヲ頼マズ、家ニ倚ラズ、独立独行スルガ肝要」[44] と述べ、定一はすゞの英学修行を「正当の目的」と理解していた。同時にロンドンから新島に対しても書簡を送り、「荊妻義此頃英学修業ノ為メ御地へ罷出候趣、何ニ箇ト御配慮ニ預リ候事ト存申候、乍憚右宜敷御願申上候、乍末毫御令閨様及藤田愛爾君ニ御鳳声奉願候」[45] と頼んでいた。

在京の２年間で、実際にすゞが英学にどれほど取り組めたかは不明ではあるが、幼い子どもをかかえ教員という常勤の職務をもちながら、夫と同じ志をもって英学を学ぼうとしたことは確かである。結婚後まもない時期に定一にあてた前掲の書簡で「夫が出陣すれば、わたしもまた扶助のために出陣したい」（原文では「夫出陣すれバ妾も亦扶助の為め出陣せんと欲す」）と記した意図は、決していわゆる内助の功に限られたものではなかったことがわかる。

さらに興味深いのは、こうしたすゞと定一の英学への志向は、社会的・地域的な広がりをもっていたことだろう。すなわち、すゞが京都に出た時期と同時期に、福井においても英学校や英語を教える私塾設立の動きが複数の流れで起こっていた。

そのひとつが、杉田定一と関係の深い岡部広（1856－1923）を中心に進められた英学校設立計画であった。岡部広は、定一の先妻都賀の父岡部長の養子で1882年（明治15）12月に定一が北陸自由新聞を創刊した際には主幹となった人物である。新島にあてた岡部の手紙６通[46] から、その動向がわかる。あるいは1886年９月に宮城県知事松平正直（1844－1915、福井藩士）が援助し、新島が校長となって創設された宮城英学校（東華学校）[47] の動きも影響を与えていたのかもしれない。

田中智子氏によれば[48]、定一が欧米へ旅立った年（1886年）の暮れ、当時県会議員であり県会副議長であった岡部は、新島に対して米国人で「徳育熱心ノ良教師壱名」の斡旋を依頼した。教師の招聘は定一の欧米出発前から計画されていたものとされ、おりしも県会では、この年４月に公布された中学校令によって尋常中学校は一府県一校を原則とすることになり、小浜中学校を廃校にする代替案として「小浜英語学校」の設置が議論されていた。この学校費は結果としては否決されたが、条約改正も近く内地雑居が許可されそうな情勢のなかで、議員間で英語教育必要論が高まっていたという。翌87年（明治20）１月には、県会関係者、織工会社関係者ら嶺北の有力者34名が発起人となり、すでに漢学・英語・数学を教授していた福井市中の私塾福井文学舎を仮事務所とし、これを充実する計画「私立専門学校設立移文」[49] が示された。

確かにこの時期福井では、桐生・京都産地に学んで輸出向け羽二重織物の製織技術を導入しようとしており、欧米市場への関心は高まっていた。富田循良・長谷部弘連ら士族による共同出資会社であった織工会社[50] が中心となり、1887年（明治20）３月には、京都にいた技術者高力直寛を招き３週間の講習会が行われ、これをきっかけに羽二重製織技術が福井市街から郡部へと急速に広がりをみせた[51]。

表３　嶺北地域における英学関係私塾等の動向（1884－91年）

年　月　日	新聞記事
1884(明治17). 3.22	［広告］英学並普通洋算　福井宝永上町還相寺にて　徳村留吉
7.24	着任の福井中学校松田校長　９月１日より校内俊秀な生徒を選抜　自宅で英学教授
10.22	師範学校幹事田口一等教諭　自邸で英学教授　英学の良教授に乏しき当地
12.10	英学数学漢学　自宅教授　福井市乾下町　松原暹
1885(　18). 7.15	英学講習会　阪井港に遷鶯会　開会の緒言　幹事飯塚雄・光成亀太郎
8. 4	遷鶯会　阪井港英学講習会　戸長近藤藤五郎　自ら同港商家壮年子弟に英学の必須なるを演説
8.27	［広告］時運の到来　英学の講習会　午後３時自同10時　阪井港今新町　遷鶯会
9. 6	出願中の南越義塾　当市毛矢町笹治氏宅にて漢学英学数学を教授　山口透氏　緒方正修氏　奎運会会員34名　遷鶯会会員13名（いずれも阪井港）
9.10	［広告］奎運会（阪井港）　内地雑居近きにあるの風説　英学講習会
10. 8	［広告］英語学科を設く　当市元大名町　月々50銭　福井法律学舎
10. 9	福井文学舎（福井市毛矢町）夜学授業　英学漢学数学
12. 5	衰頽は衰頽にあらず　遷鶯会22･３名　奎運会52･３名から減少　英学（阪井港）
1886(　19). 6. 9	文学舎　福井市毛矢町　吉田郡豪農渡辺環氏が老松下町の自宅を無賃にて貸渡　英語漢学数学教授
7.14	阪井港英学の衰微（会員減少）
8.25	［広告］英学研究所　上原慶太郎　中村方（福井）
1887(　20).11.30	透成学舎　福井商業家の有志　一時休学　12月１日より旧来の英語研究会を開く
12. 2	英人の雇継　勝山で聘来せし英語教師ブラツクヘル　福井の医学校・真宗大谷派有志
1888(　21). 1.13	坂井港通信　英学再興　旧臘当港高等小学校に英学科を増設　神戸に寄留する岩田万次郎氏を招聘　本月11日より夜学開始
2.11	大野通信　語学教師を聘す　今回西京大谷派東本願寺学校から福井大谷派学場へ差し向けられた日本人語学教師　同校には英人フラツク氏をさきに聘せられたるにより不用小学校教員及び僧侶有志等50余名の協議により月俸22円で招聘
2.15	大野通信　真宗教学義塾　大阪府より英語教師芳松勝三郎を招聘　19日開業式予定
2.16	粟田部通信　皇跡立志館（古川文三郎・石橋清太郎発起）館則第２条　本館に於て研究する課目は読書、数学、文学、英語の４科目とす
3.16	武生通信　進脩小学校学区連合会　高等小学校に英語科を加える計画
5.19	丸岡通信　英学倍盛んならん　４月より高等科に英語　中絶の円陵学館にも英学科
6.21	武生通信　高等小学校（進脩小学校）英語明日より６時間の授業
7. 3	武生特報　英学館の再興　千秋慎一氏宅　教師は武生電信局技師原上鼎司氏
7.10	英学の勉強　福井市中の有志27･８名　元晩成小学校を借用　中学校ハルカム氏に依頼女子３・４名も
	武生特報　英学館の移転　泉町陽願寺々内唯信寺へ
8.31	勝山通信　成器小　英語科を加え英国人フェーエチブラツクウェル、続いて鹿児島県人山本忠輔を招聘　軽体操・兵式体操教師も
12. 9	大野通信　英語学校を設立（計画）
12.11	［広告］実学研究夜学会　正則英語、数学、簿記学、経済学　福井佐佳枝中町
1889(　22). 1.16	坂井港通信　英学教師去る　上西町英和速成会の上月章氏
1.20	大野通信　私立大野英語学校　鈴木重明氏設立計画中
2. 9	大野通信　私立英文学館　３日開館式
2.13	武生通信　一両年前盛んなりし英学会　消失していたが５日より水日の両日以外毎日午後４時より進脩小校長大村氏が教授
2.26	勝山通信　英語会　去る19年県令第37号小学教則改正とともに英語の必要に感し　有志尽力発起　英人「エ、エツチグツラクウエル」氏を招聘
6.28	青年会福井部夜学　県青年会数学、英学、漢文など
10.29	青年会の夜学　福井県青年会福井部７月１日以来開会　数理、英語第一科、幾何、代数、文法、英語第二科を開会
11. 7	［広告］男女会員募集　10日開会　英漢数簿記等総て実業に適切なる諸学科を教授　河南小路霊泉寺境内南越文友館　館主松原暹（福井）
1890(　23). 3.29	［広告］生徒募集　英和教校酒生村字篠尾　３年国史略　十八史略　ナショナルリーダー算術　発起人橋川庄兵衛外１名
8. 3	［広告］英学生徒募集　英語初学生30名　佐佳枝中町千野恕乎方　少年英学会（福井）
1891(　24). 3.15	米人の来福　フルトン氏　私立正則英語講習所が雇聘（福井）
4. 7	［広告］英学生募集　30名　福井市佐佳枝中町　正則英学校

注）1888年～89年６月は『福井新報』、それ以外は『福井新聞』による。

しかしながら、学校設立のための資金集めは難航し、1887年（明治20）４月頃までに頓挫してしまう。かわって計画は外国人教師を福井中学校で雇用するという現実的な路線に変更され、石黒知事の新島あての書簡[52]も残されているが、これも最終的には、武生出身の帝国大学総長渡辺洪基が推薦する人物が雇用されることになった（88年５月）。他方、この年10月には岡部広の動きとは別に日本基督伝道会社の伝道師大宮貞之助と福井市中の商工業者らによって桜州義塾という英学塾が開かれ、小・中学校生徒20名ほどが集まるようになったという。

新聞記事でみる限り、県内嶺北地域において英学関係の私塾を設ける動きは、キリスト教関係者に限らず浄土真宗関係者や商工業者らが担い手となって、福井・三国（阪井港）・武生・粟田部・大野・勝山などへも広がっていた（**表３**）。全国的にもアメリカン・ボードや同志社と関わる神戸・大阪・岡山・仙台・新潟・熊本の６都市の英学校は、すべてこの時期と重なる1885年（明治18）から87年にかけて創立されたものであった[53]。

３．京都府尋常師範学校での幼稚園教育との関わり

すゞは、1888年（明治21）３月31日付で下京区高等小学校から京都府尋常師範学校に異動（月俸15円）し[54]、翌89年９月[55]までの１年半、同校で訓導を務めた。尋常師範学校でのすゞの動向を知りうる資料はほとんど見出せないが、仙十郎の書簡控から設置後間もない幼稚園に関わっていたことがわかる。すゞの東京女子師範在学中のカリキュラムには、全国最初の附属幼稚園の保育[56]参観が組みこまれており、また在校中の校則改正で幼児保育法も課された[57]とされることから、すゞはもっとも草創期の幼稚園教育を学んでいたと考えられる[58]。

さて仙十郎としては、年度末（88年３月）にすゞを阪井港（三国）の小学校へ転勤させるつもりで借家の手配も進めていたが、辞表が受理されなかったばかりか「京都府幼稚園主任」を命じられることになった。三国への転勤・転居のために尽力していた近藤藤五郎あてのすゞ書簡（写）では「小妹前キニ京都有志者ノ厚意ヲ受ケ今一身ノ都合ヲ以テ斯ク申述ブルハ后日再会ノ時面目如何ト心配罷在候、且ツ定一ヨリ小妹ヲ托セシ新嶋先生ノ如キモ今少シク学業ヲ修メナバ如何ト勧告セラレタル趣キモ有之」[59]と、帰郷できない事情となったことを記している。近藤藤五郎（1838－93）は福井県設置当初の県会議員、阪井港松ケ下町外21ケ町村戸長、三国町長、坂井商法会議所副会頭等を務め、1885年（明治18）８月頃に三国町で活動していた英学塾遷鶯会を積極的に支援していた[60]。

京都府における最初の常設的な幼稚園は、1884年（明治17）６月に府立女学校内に附設された幼稚園であった。師範学校の実習はこの園で行われ[61]、86年には附属小学校とともに師範学校女子部に移管された（1887年尋常師範学校女子部と改称）。一方、85年（明治18）７月には竹間小学校に正式に幼児保育科が設けられ、すゞが幼稚園主任となった88年（明治21）には小学校に附設された「幼稚保育科」は修徳・京極・待賢・豊園・鴨東等に広がっていた[62]。

こうした状況を背景に1889年（明治22）９月、「京都市保育会」が創設された。全国に先駆けた幼稚園の保母と管理者である小学校長のための研修・研究組織であった。

『京都府誌』には、京都市保育会について以下のように記されている。

明治二十二年京都市待賢、竹間、銅駝（以上上京）、生祥、豊園、永松、修徳、鴨東、楊梅、開智（以上下京）

の十個幼稚園在勤の保姆及同園を管理せる当該尋常小学校長等相謀り、一の研究会を組織して京都市保育会と称し、同年九月楊梅幼稚園に於て其の発会式を挙行せり。当時の会員は男女計約四十名なりしが、爾後幼稚園の増加と共に会員数随て増加し、三十四年准会員の規程を設けて私立幼稚園及京都市以外の幼稚園職員の入会を許せしを以て総数約百名に及び益々隆盛の機運に向へり[63]。

さらにこの保育会の発会式のようすは、後年1897年（明治30）の京阪神聯合保育会設立時の回想記事「京都市保育会沿革概要」でやや具体的にわかり、すゞが師範学校訓導・幼稚園主任として出席し、講話を行っていたことが記されている。

（前略）該発会式は揚(楊)梅幼稚園にて挙行せらる、当日師範学校訓導藤井初太郎、同幼稚園主任杉田鈴の両氏出席し、幼稚園に関する一場の講和あり、当日の出席者男二十名女三十名頗る盛会なりき、此会は実に生祥尋常小学校長根本吉太郎、尚徳尋常小学校長中山熊力、開智尋常小学校長玉川直樟諸氏の唱導尽力により成立したるものなり、当時の決議により毎月一回開会し総員集会するものと校長及首席保姆の会合とを隔月とし、会場は抽籤を以て順次各園に開くことゝ定めたり、爾後各尋常小学区争うて幼稚園を創建し、今日において我市内二十の多きに達するに至れり（師範校のと私立の分とは除之）[64]

すゞの辞職願は９月17日付で承認されたことから、この京都市保育会発会式の講話が、すゞの京都府尋常師範学校での最後の仕事となったと考えられる。

まとめにかえて

1889年（明治22）秋に師範学校を辞して東京へ移ってからの杉田すゞの社会的な活動は、残念ながらほとんどわからない。『杉田鶉山翁』には「明治三十年の頃には、小石川下富坂町辺に『福井屋』といふ、小さな反物屋を出して、其処に夫人がさゝやかな商ひをして居たこともあつた」[65]とするエピソードが載せられている。小石川下富坂町は鈴の実父である藤田龍蔵の居所[66]であり、そうした商売をしていた時期があったのかもしれない。

また、亡くなる直前のようすについては、池内啓氏が関連の書簡[67]を紹介している。それはすゞの死去する１か月ほど前に、定一が三国町の代議士で腹心の名村忠治にあてたもので、すゞは1915年（大正４）夏頃から体調をくずしていた。手術を受けていったん回復したものの、翌年春には腹水に苦しめられており、その治療のために定一は1000円の借金を申し込んでいた。

以上、鳥羽藩下士層に位置した生家藤田家と、初期の東京女子師範学校卒業生のあり様、政治家杉田定一と結婚した当初の互いの夫婦像、英学を学ぼうとした際の京都での人的関係と英学を志した背景、さらに京都府の草創期の幼稚園教育にかかわった杉田すゞの事績を跡づけてきた。すゞ自身の記した資料が極めて少ないなか、周辺的な資料を積み重ねるかたちではあるが、従来ほとんど注目されなかった杉田すゞの先駆的な明治の女性像をささやかながら浮かびあがらせることができていれば、さいわいである。

注

１）第１回の総選挙で当選し、第４回を除いて第10回まで衆議院議員を務め、衆議院議長や貴族院議員としても活躍した。

2）杉田定一は、1881年（明治14）５月に福井藩士族岡部長（ひさし）の長女都賀（1859－1883）と結婚したが、都賀は２年ほどで病死している。岡部家は、福井藩では家老を務める高知席17家のひとつで1500石、岡部長（1836－1906）は1866年（慶応２）に家督相続（『福井藩士履歴』２　福井県文書館資料叢書10、2014年）。

3）『日本女性人名辞典』1998年 p.579。その内容は死亡記事を集めた『大正過去帳　物故人名辞典』（1973年、p.98）掲載のもののみである。

4）家近良樹「ある豪農親子の近代－杉田仙十郎・定一夫婦の場合－」『日本歴史』722、2008年７月、同「『ぼっちゃん』国士誕生の背景について－杉田仙十郎を主たる対象として－」大阪経済大学『経済史研究』12、2009年、同「杉田仙十郎・定一父子と近代の受容」町田市立自由民権資料館紀要『自由民権』25、2012年３月。

5）池内啓「杉田定一の一側面（三）」『福井県文書館研究紀要』10、2013年３月。

6）大阪経済大学の「杉田定一関係文書」は、杉田仙十郎・定一父子に関係する１万点余におよぶ文書群で、漢籍以外の10,302件の目録が附属図書館のサイトで公開され、一部の資料を除いてウェブ上から画像の閲覧も可能である。

　一方、同志社大学の新島遺品庫は、同志社社史資料センターが、自宅（新島旧邸）や蔵書（新島旧邸文庫）などとともに保存・管理するアーカイブズで、新島襄永眠50年記念事業の一環として1942年に竣工した資料収蔵庫に収められた資料約6000点が検索、同様にウェブ上で閲覧できる。この企画展では、ロンドンに遊学中の杉田から新島にあてた書簡を紹介した。

7）地租軽減運動において杉田定一の片腕となって活躍した矢尾八兵衛の資料（矢尾真雄家文書）、杉田定一や福井県政治史の研究者である池内啓の収集資料（池内啓収集（杉田家旧蔵）文書）、松平文庫等。

8）007-030-002「（杉田仙十郎功績、水利堤防、学校建設に付覚写他、計７点一綴）」、007-030-003「（波寄村杉田仙十郎大庄屋取揚之件に付願書写、仙十郎家財諸道具等取上に付覚写他、計21点一綴）」、007-030-009「（獄中述懐、杉田定一伝、藤田すず履歴書他書上写）」大阪経済大学杉田定一関係文書。

9）同郷の御木本幸吉（1858－1954）の伝記、乙竹岩造『伝記御木本幸吉』（講談社、1950年）では、「家計の不如意と子供の多勢とのため、学問といつては、寺子屋に通つたほかには学校教育を受けることができなかつた。その寺子屋は栗原亮休といつて、衆議院議員として有名であつた栗原亮一の父が開いていた」として、栗原との関わりが記されている。

　同時にこの伝記では、すゞの父藤田龍蔵についても「明治七八年の頃になつて、世間もようやく学問の必要に目ざめてきたので、吉松（幸吉―引用注）は自分で発起して、四五の友人とともに夜学会を設け、みずから、その幹事となつて旧鳥羽藩士藤田勇（マス）蔵（故貴族院議員藤田四郎の実父）を教師に仰いで、勉強したものである。栗原亮一や藤田四郎が幸吉の竹馬の友であるのも、こうした因縁からである」としている。なお藤田龍蔵が教師となった夜学会のエピソードは、乙竹による最初の伝記である『御木本幸吉』（培風館、1948年）には収載されていない。

10）「志州鳥羽藩禄高控付明細帳（安政四年）」『鳥羽市史』上巻 p.1011。

11）「御家中分限帳（元治元年）」同上、p.1056。

12）『鳥羽藩禄高帳　明治三年庚午年十二月改制』鳥羽郷土資料刊行会、1975年。

13）梅村佳代「近世志摩国の寺子屋－鳥羽町栗原家を事例として－」『国立歴史民俗博物館研究報告』54、1993年。梅村論文によれば、栗原家は勇蔵の父元平の代から寺子屋を開業しており、武士・庶民の子どもたち（男女）に手習い、算術・裁縫等を教えていた。

14）『日本人名大事典』第5巻、1938年、1979年復刻版。

15）本科の卒業生は、1890年（明治23）に高等師範科が設置されてからも、1900年（明治33）まで年々30名以下で推移した。

16）佐方志津（鎮子）は、東京女子師範の第一期生として入学し、卒業後、附属小学校、幼稚園、高等女学校等の教員を38年間にわたって務めた（『桜蔭会史』1940年、p.261－262）。

17）山川二葉は、会津藩の重臣山川重固の長女。1877年（明治10）12月から生徒取締となり、1904年（明治37）まで同校の寄宿舎制度に関わった（同上、p.251－252）。

18）おもな職員名は『東京女子高等師範学校沿革略志』1915年、p.26、人数は『お茶の水女子大学百年史』、1984年、p.860による。
19）『お茶の水女子大学百年史』1984年、p.51。
20）鈴木（木村）せいは、東京府麹町小学校訓導となるが85年に退職、熊崎（田沢）ヨウは、２年間千葉県師範女子部に勤務（以上、『桜蔭会史』1940年）。茂木（渡辺）せきは、88年から89年にかけて東京府久松小学校訓導であった（「高等師範学校一覧」自明治20年４月至明治21年３月、同自明治22年４月至明治23年３月、筑波大学附属図書館蔵）。
21）池内啓氏は定一の晩年の覚書（A0174-00188「（易占の覚書など）」池内啓収集（杉田家旧蔵）文書、福井県文書館蔵）のなかに定一・すゞの生年月日とともに「明治十七年七月十三日結婚　明治十七年八月九（マヽ）日入籍」と記されていることから、７月13日結婚としている（「杉田定一の一側面（続）」『福井県文書館研究紀要』７、2010年３月）。
22）注８）参照。
23）注５）参照。
24）東洋学館は日本人が海外に設立した最初の学校とされるが、１年で閉校となった（熟美保子「上海東洋学館と『興亜』意識の変化－杉田定一を中心に－」大阪経済大学『経済史研究』12、2009年）。
25）007-010-002「遊清雑唸（渡清に付所感書上）」大阪経済大学杉田定一関係文書。
26）この漢詩は、杉田定一の生前に編まれた伝記の「蹶起して清国に渡る」の項に収載されている（雑賀博愛『杉田鶉山翁』1928年）。
27）池内啓「杉田定一の一側面（続）」『福井県文書館研究紀要』７、2010年３月。
28）033-023「（故橋本左内の一大石碑建設に付）」大阪経済大学杉田定一関係文書。
29）家近良樹・飯塚一幸編『杉田定一関係文書史料集』２、2013年所収、p.179－180。前掲池内論文「杉田定一の一側面（三）」『福井県文書館研究紀要』10にも掲載。
30）岡倉天心も『日本の目覚め』（1904年）で、安政の大獄で倒れた橋本左内を、イタリア統一で活躍した「日本のマッツィーニともいうべき知性の政治家」と、逃れることができた西郷隆盛を「日本のガリバルディ、薩摩の大西郷」と紹介している（『近代日本思想体系』７　岡倉天心集　1976年、p.132）。
31）定一は、ガリバルディに寄せた漢詩も残している。『杉田鶉山翁』1928年、p.589－590。
32）福井県文書館企画展示パンフレット『杉田仙十郎・定一・鈴おやこ展－自由民権の土壌－』2013年１月。
33）前掲家近論文「ある豪農親子の近代－杉田仙十郎・定一夫婦の場合－」、同「杉田仙十郎・定一父子と近代の受容」。
34）007-030-009「（獄中述懐、杉田定一伝、藤田すず履歴書他書上写）」大阪経済大学杉田定一関係文書。
35）028-136-008-001「〔書簡〕（謙彬、山田信忠娘と入籍及近類縁者近況報告、聖像下附願に付知事石黒務氏と面会他書上の事）」1887年12月30日、大阪経済大学杉田定一関係文書。
36）起案1887年（明治20）11月30日、決済12月１日、扱済12月２日「教員進退録」明20-35、京都府庁文書、京都府総合資料館蔵。
37）前掲家近論文「ある豪農親子の近代－杉田仙十郎・定一夫婦の場合－」。
38）「同志社大学創立記事（明治十六年一月～十七年一月）」『新島襄全集』１、1983年、p.175。
39）「出遊記」『新島襄全集』５、1984年、p.228－316。
40）前掲家近論文「杉田仙十郎・定一父子と近代の受容」。
41）注35）参照。
42）前掲家近論文「ある豪農親子の近代－杉田仙十郎・定一夫婦の場合－」では、「藤田」をすゞの父藤田龍蔵と解釈しているが、藤田愛爾（愛二）であると考えられる。
43）『同志社九十年小史』1965年、p.254、『同志社百年史』通史編１、1979年、p.220･821。いずれも「藤田愛二」と表記されている。
44）028-137-019-001「〔書簡〕（クリスマス風俗に付報告、絵入新聞郵送の事、英学勉強の為鈴京都表へ罷越一件他）」、

大阪経済大学杉田定一関係文書。

45)「新島襄宛書簡」1887年12月14日（『新島襄全集』 9 上、1994年、p.318－319）なお、全集では「藤田愛乕」としているが「藤田愛爾」の誤りと考えられる。

46)『新島襄全集』 9　来簡編上、1994年。

47)『同志社百年史』通史編 1 、1979年、p.273－287。

48) 田中智子「明治中期における地域の私立英学校構想と同志社」『キリスト教社会問題研究』60、2011年。

49) 同上、新島遺品庫、0778a、
http://joseph.doshisha.ac.jp/ihinko/html/n01/n01010/N0101001G.html［参照2014. 1 . 5 ］。

50)「福井士族『織工会社』への資金貸与」明治福井繊維産業資料一覧、越前若狭歴史回廊
http://book.geocities.jp/oklibdb/meiji/data/sr100.html［参照2014. 1 . 5 ］。

51)『福井県史』通史編 5 、1994年、p.542－546。

52)『新島襄全集』 9　来簡編上、1994年、p.395。なお、石黒務は岡部広からの「教師之義」について依頼するとともに、高等小学校を卒業する予定の娘の進学先として同志社女学校を考えており、同校規則の恵与を依頼していた。

53) 前掲田中論文「明治中期における地域の私立英学校構想と同志社」。

54)「教員進退録」明21－34、京都府庁文書、京都府総合資料館蔵。

55) 決済1889年（明治22） 9 月17日、「教員進退録」明22－31、京都府庁文書、京都府総合資料館蔵。

56) 文部省『幼稚園教育百年史』1979年、p.53－63。

57)『お茶の水女子大学百年史』1984年、p.23。

58) あるいは、同郷鳥羽藩出身の近藤真琴（1831－86）がウィーン万博での幼児教育関連の展示をまとめた『博覧會見聞録別記 子育の巻』等も目にしていたかもしれない。

59) 前掲池内論文「杉田定一の一側面（三）」。

60)『福井県議会史』議員名鑑、1975年、p.29－31、『福井新聞』1885年 8 月 4 日。

61)『京都府誌』上、1915年、p.238。

62) 同上、p.238－239。

63) 同上、p.240－241。

64)『京阪神保育会雑誌』第 1 号、1898年 7 月（復刻版『京阪神聯合保育会雑誌』 1 、1983年）、なお、この「京都市保育会沿革概要」は、水野浩志「日本幼児保育史の研究」『幼児の教育』61－11、1962年11月で紹介されている。

65) 雑賀博愛『杉田鶉山翁』1928年、p.796。このエピソードについて、冨永重『杉田定一翁小伝』（1934年）でも「在る時は東京に於いて福井屋と称する些やかな半襟の店を営んで、一家の糧を稼いだことも一再ではなかつたといふ」とされている。

66) 1888年（明治21） 1 月には藤田龍蔵は「小石川区下富阪町十八番地」を住所としていた（028-137-014「〔年賀状〕」、大阪経済大学杉田定一関係文書）。

67) 池内啓「一通の書簡」『福井県史しおり』資料編11、1985年。